



Title	<書評> James Williams, gilles deleuze's difference and repetition.-a critical introduction and guide, Edinburgh University Press Ltd, 2003.
Author(s)	小林, 卓也
Citation	年報人間科学. 2005, 26, p. 289-294
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/25898
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

James Williams, *gilles deleuze's difference and repetition.-a critical introduction and guide*,
Edinburgh University Press Ltd, 2003.

小林卓也

1 哲学の書物について語る」と

ドゥルーズはアメリカ版『差異と反復』の序文において、哲学史を書くということは「偉大な思想家がもつてている矢あるいは道具を究明し、その思想家の獲物と戦利品を、つまり彼が発見した大陸を究明する」ことであると表現している。哲学の書物について何かしらを語ること。それはその書物自身に回帰することに他ならない。

ジェイムズ・ウイリアムズによるこの著書、『ジル・ドゥルーズの『差異と反復』について』⁽¹⁾は徹底して『差異と反復』の内側に留まり続け、回帰し続ける。ウイリアムズによるドゥルーズの概念の説明、そしてその批判は、すべて『差異と反復』という書物の説明に向けられている。ウイリアムズはドゥルーズの用いる概念やその装置を『差異と反復』に沿って順番に紹介する。さらに各章においては、まずドゥルーズの哲学的概念が説明され、次いでそれに対する批判的問いかけが行われる。さらにその問いかけに対応する解答を『差異と反復』において見出すという形式で議論は展開されていく。

ウイリアムズによるこの著書は、表題にもあるように『差異と反復』の批判的紹介である。しかし、そこにおいて提示される批判的意見は、常にドゥルーズ哲学の体系内で解消される。それは哲学史、すなわちある哲学の書物について何かしらを語ることに対するドゥルーズの意見に極めて忠実であると思われる。

しかし本稿においてわれわれは『差異と反復』という哲学の書物について語るこのウイリアムズの著書そのものについて語らなければならない。われわれは『差異と反復』から一重に隔たった場所にいるのだ。では、哲学の書物の二次文献について何かしらを語ることは一体何を意味するのだろうか。

仮にウイリアムズの著書もまたひとつ哲学の書物であるとするならば、われわれはその書物自体の中にその戦利品や獲得物を見出さなければならない。言い換えれば、われわれは彼の著書を単なる「紹介」に貶めることなく、彼の著書それ自体の存在意義を汲み取らなければならない。本稿においてわれわれは、ウイリアムズの著書において中心的な役割を果たしている部分を見出したい。そうすることではじめてこの著書自体の意義、さらには『差異と反復』とウイリアムズの著書の出会いが意味するものが明らかになるのではないだろうか。

2 潜在性と現実性

結論から言うと、この著書の重要な性質は、ドゥルーズの哲学体系における相互的関係性を明瞭に提示したことであると思われる。では、ドゥルーズにおける相互的関係性とは一体どのようなものか。ウイリアムズにしたがって、『差異と反復』におけるドゥルーズの意図を簡潔に示せば、次の三つが挙げられる。ひとつは、あらゆる同一性、感覚、概念の表象とは、われわれの幻想であるというこ

と。そして、どれほどわれわれが、あらゆる差異をそのような同一性に従属させ、差異そのものを見過ごしているかということ。さらには、われわれの思考や身体がいかに諸々の強度や純粹な差異に関わっているのかを示すことである。

しかし差異そのものや純粹な差異は、表象不可能であり、いかなる同一性にも帰属しない完全なる潜在的なものとして描かれる。ならば、潜在的な差異そのものなどそもそも言表不可能なのではないか。そのような意見に対しウイリアムズは、「純粹な差異や差異そのものは、現実的なものとの関係において規定されることによってのみ考えられるものである」⁽¹⁾ と主張する。潜在性は現実性と同時的に見出される。彼は、潜在的なものと現実的なものの間にはこのような相補的な規定の関係が存在するということこそが、ドゥルーズの哲学において中心的な役割を果たしていると考えるのだ。潜在的なものと現実的なものとの相補的規定。これこそウイリアムズがこの著書において提示しているもっとも重要な観点である。

3 死の際

では、潜在性と現実性の触れあう場、あるいは現実的なものが潜在的なものへと移行する瞬間とはどのようなものか。ウイリアムズによればそれは死である。

死には二つの面がある。つまり、現実的な死とは脳内の脈拍や

活動の中止であるが、それはまた、そこにおいてわれわれの生成がわれわれ自身を取り返しがたく変化するよう仕向ける一連の潜在的な諸々の死でもあるのだ。(iv)

ウイリアムズは、ドゥルーズが死という出来事を現実性から潜在性の移行として提示していることに注目する。では現実的な死とはいったい何を意味するのだろうか。

ドゥルーズは『差異と反復』において、モーリス・ブランショを引用しながら、現実的な死とは「人称的な消滅であり、『私』、自己によって表象されるこの差異の取り消しである」(v)と述べている。すなわち、「私」の同一性という表象は、生体の現実的な死によって消滅するのだ。

しかし、現実的な死において「私」の同一性という表象が消滅するとは一体どういうことであろうか。われわれの生体は、何千万もの細胞が時々刻々と死に、そしてあらたに生まれている身体組織である。実際われわれは、とどまることなく変化し続ける、そのような身体組織を指して同一的な「私」と呼んでいる。ならば、「私」の同一性とは単なる意識による抽象化の産物であろうか。そうかもしれない。しかし、厳密に考えてみると、そのような抽象化を行う意識もまた同一物としての「私」の意識に他ならない。

ましてや、「死によって『私』の同一性は崩壊する」という言明は、死によって『自我』を表象する主体が消滅するがゆえに、「私」の同一性を保証することができなくなるというような安直な議論を意

味しない。なぜなら現実的な個体としての私が消滅しようとも、他人は「私」の同一性を、ひとつの「事物」として表象することが可能であるからだ。

では、現実における「私」や「自我」といった表象は、そもそも一体何によって保証されているのか。

ドゥルーズによればある「もの」が表象されるための条件とは、「質、あるいは種別化」と「延長、あるいは組織化」という相關的なふたつのアспектである。質はそれが展開される延長なしに存在しないし、種は組織の諸部分なしに語られることはない。(vi)ある事物はこの二重の総合において表象され、他の事物から判明に区別される。さらに『差異と反復』においてドゥルーズは、「『私』は本来的に心的な種別化を形成し、『自我』は本来的に心的な組織化を形成している」(vi)と主張する。したがって、「私」と「自我」とは、先に挙げた「種別化」に対する「組織化」と同じ相関的な関係にあると考えられているのだ。(vi)。ならば、まさに生体組織すなわち延長としての現実的な死は、そのまま相関的な関係項としての「私」という種別化された人称、「私」という同一性の崩壊を意味していると考えられる。しかし表象の同一性に関する問題は今後さらに考察されなければならない議論であろう。

ともかく、現実的な死による同一性の崩壊によって私は「私」ではなくなる。厳密に言えば、私は誰でもなく、私はあなたであり、あなたは私であり、あらゆるものがあらゆるものになる可能な世界、あるいは出来事としての世界が顕現するのだ。すなわちそれを

境に、自己や「私」といったあらゆる同一性に従属しない諸々の個体 (individual) とその差異による多様性としての世界が顕現する。

これまでの議論をまとめると次のようになる。つまり、現実における個体は、種別化による同一性を許容する個体であり、まさにあらゆる他者から個別的に区別される (individualized) 個体であった。

すなわち現実性における個体間の差異は必然的に同一性に関わる。それに対し潜在性における個体間の差異は、決していかなる同一性にも従属しない。それはいわば「純粹な差異」「それ自身における差異」である。

さらにドゥルーズによれば、そのような潜在的な個体こそが、現実における個別的な自己や身体において表現される諸々の強度、すなわち理念と関わっている。本稿において個体と強度あるいは理念の関係性、ドゥルーズが表現という概念に与える複雑な説明を論じつくすことはできない。しかし、ここで重要なことは、ウイリアムズが個体的なものを単に理念や強度との関連において語るだけではなく、それが必然的に現実における同一性とともに提示されなければならぬと考えていることである。すなわち、同一性に従属しない純粹な差異を提示するためには、まず、必然的に同一性に従属する現実において同一性が崩壊する場面を提示しなければならないのだ。

さらにウイリアムズは、個体とは「必然的な同一化に反して作用する個体化の過程、つまり現実的かつ潜在的なもうもろの関係性の

過程」⁽²⁵⁾ そのものであると主張する。死という現象が示唆しているのは、同一性の崩壊だけでなく、現実性から潜在性への必然的な移行と、潜在性から現実的な同一化への必然的な移行という、個体そのものの二重的なあり方をも示唆していくのである。

4 個体性の哲学

現実的かつ潜在的な個体化の過程そのものである個体という存在が、ドゥルーズの哲学において重要な位置を占めているということは言うまでもない。しかし個体的なものを中心に据えた多くの哲学的な議論がそうであるように、それは常に自我論に陥る危険性にさらされている。デカルトは言うまでもなく、サルトルですら主觀と対象という関係性を乗り越えることができなかつた。ドゥルーズは、サルトルが主觀と対象の関係性を他者そのものに与えただけに留まったことを批判している⁽²⁶⁾。しかしその批判は、個体による哲学を主張するドゥルーズ自身にも向けられるのではないだろうか。

しかし上述したように、ドゥルーズにとっての個体とはもはや自己や「私」といった語で語られるものではなく、主觀と客觀の図式に還元されるものではない。ましてや個体とは、現実における不可入性によって定義されるものでもなければ、単に潜在性によってのみ定義されるものでもない。正確に言えばドゥルーズは「自己」や主体を、個体と結び付けられた諸々の過程における契機として位置づける⁽²⁷⁾。すなわちドゥルーズは個体的なものという概念そのもの

を変化させることで哲学的な困難を克服するのだ⁽²⁴⁾。

いまや哲学は自⁽²⁵⁾」や「私」といった同一性の枠組みを取り払い、諸々の強度、理念を特異的な仕方で表現する諸々の個体による多様的な世界に向かって開かれた。その際、この個体間の関係を「あたかも主体と対象の関係であるかのように考へることは誤りである」⁽²⁶⁾。それは、自らの世界を共有可能なものにし、よりよく理解可能なものにしようとした意図する側によって、他者そのものを、また他者との出会いを貶めることに他ならない。

むしろドゥルーズにとって他者との出会いとは、私の世界をより奇妙なものにする契機に他ならない。なぜならそれは「十分にその中心軸を把握できない、諸々の異なる動態的な過程間の干渉である」⁽²⁷⁾からだ。他者の「おびえた表情とは、私が見たことのない可能的世界の表現、あるいは世界のおそろしい何ものかの表現である」⁽²⁸⁾。ドゥルーズにとって他者とは私が知覚し得ない可能的世界を表現するものであり、またその可能的な世界はその他者の表現においてのみ存在するものである。

こうして哲学は、ある唯一的な思惟する主体を特権化することをやめ、諸々の個体と他の個体との関係性そのものを問題としなければならない。ドゥルーズにとって、おのれの特異性において私の知覚し得ない世界を表現している他者とは「第一に、それがなければ、知覚全体が適切に機能しないような知覚領域の構造」⁽²⁹⁾ですらあるのだ。

したがって『差異と反復』においてドゥルーズが提案する「他者

とともにおのれを展開しすぎないこと、他者を展開しすぎないこと」と「⁽³⁰⁾」という二つの原理を、ウイリアムズは個体的な世界における倫理的原理として理解する。なぜなら、ドゥルーズの哲学において可能的世界に実在性を与える他者は決して虚げられてはならないからだ。われわれは他者に対して同一性を強要してはならず、また反対に他者に対して自らの同一性を強要してはならない。われわれは他者が現実的な個別的他者として分化され、展開される以前において、特異的な仕方で諸々の強度や理念を表現する他者固有の個体化の過程それ自体を理解しなければならない。

5 相補的関係性としての個体の重要性

潜在性と現実性の相補的規定は、ドゥルーズ哲学を語る上でもっとも重要かつ、不可欠な視点である。ウイリアムズは「ドゥルーズにとっては決定的に、分化なくしていかなる差異化も存在しない」⁽³¹⁾ということを強調する。冒頭に述べたように、同一性にしたがうことなき潜在的な差異そのものについて言及することは非常に困難なことである。そもそもドゥルーズの哲学を潜在性と現実性の単なる二世界論として提示することそれ自体には、いかなる理論的根拠も意義も見出されない。それはただの無根拠な形而上学にすぎないだろう。

事実、たとえばハイデガーにとって、存在と存在者の存在論的差異を提示するためには、現存在の実存論的分析が必要であった。す

なわち、存在者の存在への関与、あるいはその存在論的領域とは、それ自体としてではなく、むしろ現存在それ自体の現象学的分析によれば、つまり日常的に存在する現存在の非本来的様態である「類落」においてはじめて明るみに出されるものである。同様に、デュルーズの哲学において、あくたぐの潜在性として描かれる超越論的領域の理論的妥当性やその実在性が確保されるためには、いの潜在性と現実性の相補的関係性がその中心に置かなければならぬ。そして潜在性と現実性というふたつの側面を持つ個体こそがその役割を担うのである。

われわれはこれをウェーライアムズの著書における戦利品と獲得物であると考える。しかしわれわれはウェーライアムズが発見した大陸に定住してはならない。われわれはすぐにはまた次の島へと渡る準備を始めなければならないのだ。

注

- (i) Gilles Deleuze, *Deux régimes de fous, textes et entretiens 1953-1974*, 2002, Les éditions de minuit, p.134. (邦訳、『無人島 1953-1968』) 伊藤邦一他訳、河出書房新社、2003年、200+201頁^o)
- (ii) *Différence et répétition*, p.330. (邦訳、383頁^o) 読しては次のようは述べられており、「したがって、基本的な心的相関関係は、『私』は『自分』(田我)を思考する)とこう言い方で表現されるのであって、それはかようど、生物学的相関関係が、種々の部分との相補性、質と広がりとの相補性として表現されるのと同様である」
- (ix) Williams, p.205
- (x) Différence et répétition, p.334. (邦訳、387頁^o)
- (xi) Williams, p.220.
- (xii) デュルーズにとって個体とは、単なる思考する主体などではなく、個別的な感覚によって諸々の理念や潜在的な理念を表現する個体に他ならない。ウェーライアムズは、そこにはスピノザとライプニッツの影響を見ている。すなわち、理念と強度を表現している個体と、世界全体を表現しながらもおのれの個別的なペースペクティブによって規定されるモナリ的な個体からなるひとつのシステム。潜在的なものと現実的なものはまさにいの個体化の過程の両側面であり、それらが個体の実在性を規定しているのだ。
- (xiii) Williams, p.209.
- (xiv) *Ibid.*
- (xv) Gilles Deleuze, «Michel Tournier et le monde sans autrui», *Logique du sens*, 1969, Les éditions de minuit, p.357. (邦訳、『意味の論理』) 伊藤邦一他訳、法政大学出版局、1997年、337頁^o)
- (xvi) *Ibid.* p.357. (邦訳、382頁^o)
- (xvii) *Différence et répétition*, p.335. (邦訳、389頁^o)
- (xviii) Williams, p.199.